# 大野城市の文化財

第　43　集

大野城市の遺跡⑪乙金編

２０１１年

大野城市教育委員会

# 序

『大野城市の文化財』が完成しました。今回は乙金第二土地区画整理事業に伴う発掘調査成果について紹介します。

乙金地区では事業面積が41.2ｈａにおよぶ大規模な区画整理事業が計画され、平成19年度より本格的な発掘調査に着手しました。発掘調査では旧石器時代から近世・近現代にいたるまでの様々な遺跡が発見されております。本書ではこれまでの調査成果について、古い時代から新しい時代へと順を追って報告し、乙金地区の歴史を紹介したいと思います。

遺跡は土地に刻まれた歴史であり、過去の人々がいかに生きてきたかを伝えるとともに、我々もまた歴史の中に生きていることを教えてくれます。本書が過去の人々のいとなみを現在、さらには未来へと伝えていくために、少しでも役立てれば幸いです。

平成23年3月31日

大野城市教育委員会
教育長　古 賀　宮 太

# 目　　次


1.　旧石器・縄文時代―狩人たちの痕跡―…… 4
2.　弥生時代―大野城市最古の農村？―…… 5
3.　古墳時代―乙金大開発の時代―…… 6
　ⅰ）古墳を造る
　ⅱ）集落跡の発見と人々の暮らし
4.　奈良・平安時代―小さな村と役人の姿―……10
5.　鎌倉・室町時代―再び大開発の時代―……12
　ⅰ）墓から見た中世の乙金
　ⅱ）乙金村のルーツ？
　ⅲ）大野城市内初、水田遺跡の発見
6．江戸時代……15
7．おわりに……16

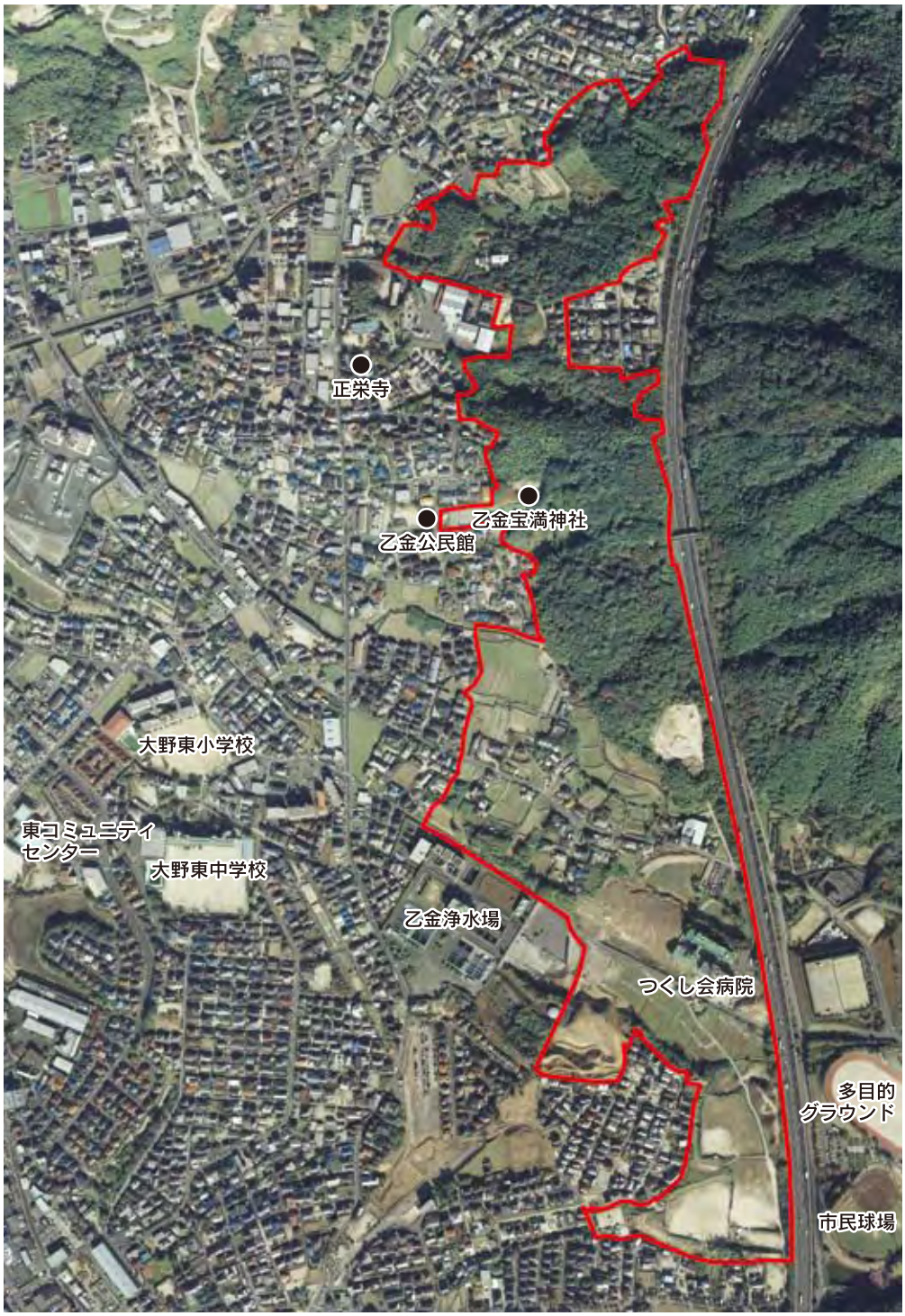
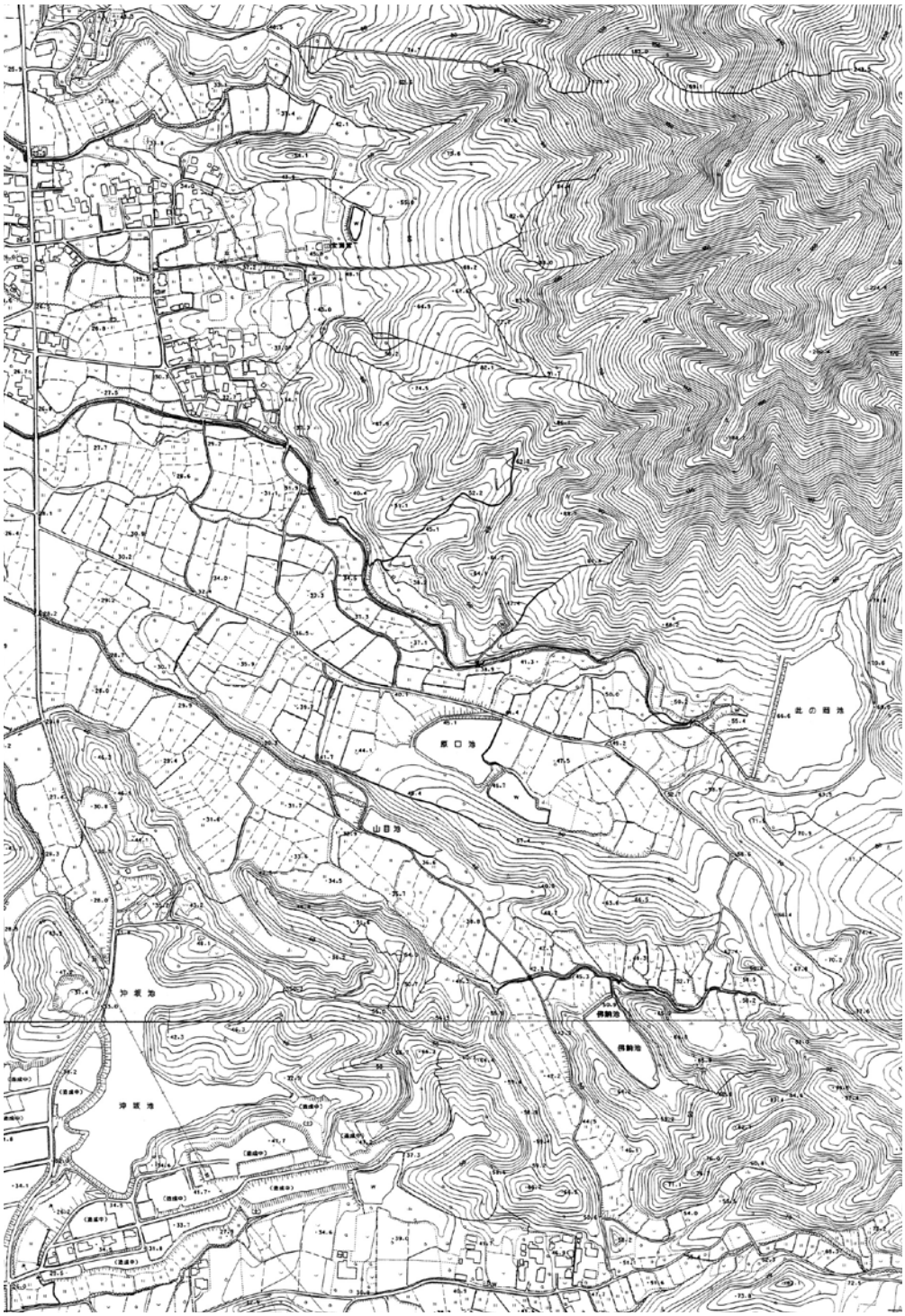



写真1　区画整理以前の乙金（上が北）

第1図　区画整理前の乙金と発掘調査した場所（1/7,500）




第2図　50年前の乙金の地形（1/7,500）

## １．旧石器・縄文時代　―狩人たちの痕跡―

乙金地区では15000年以上前（旧石器時代）の石器が発見されており、当時から人々が暮らしていたことが分かっています。続く縄文時代（約１2000年前～2500年前）になると、乙金地区の各所で、狩りの道具である石鏃（石の矢じり）(写真２）や煮炊きの道具である縄文土器が出土しています。特に薬師の森遺跡21次調査では、約8000年前の土器や石器が2500点以上発見されていることから、当時の中心的な生活の場であったと考えられるでしょう。

**写真2　石の矢じり**

**写真3　動物を狙った落とし穴**

また、イノシシやシカを標的とした「落し穴」(写真３）もたくさん見つかりました。深さは１ｍ以上もあり、落ちたら簡単に脱出することができないものです。縄文人たちは、狩りの場、生活の場として、乙金地区の自然の恵みを活かしていたのでしょう。

## ２．弥生時代　―大野城市内最古の農村？―

弥生時代になると本格的な稲作農耕が伝わり、日本列島は農耕社会へと突入していくことになります。弥生時代への移り変わりは狩猟採集生活から農耕生活に変わっただけでなく、食生活や住まい、形質（骨格や顔つき）や思想までもが大きく変わった時代であり、社会の大転換期と考えられています。

ところで、弥生時代が始まるころ、薬師の森遺跡では小さな集落が営まれていたようです。ここでは「突帯文土器」といわれる縄文土器の系譜を引く土器と、「板付式土器」と呼ばれる弥生時代になって新たに出現する土器が、一つの遺構の中から一緒に出土しており注目できます（写真４）。突帯文土器とは縄文時代の終わりごろに出現する土器で、口縁部に粘土紐を貼り付けた「突帯文」という文様に特徴があります。土器は厚く、表面を貝殻によって整えており、全体に粗剛な印象を受けます（写真４右）。これに対し、板付式土器は口縁部が外側に折れ曲がる点が特徴で、器壁は薄く、土器表面をヘラのような工具で丁寧に整えており、非常に繊細なつくりをしています（写真４左）。このように系譜が異なる土器が一緒に出土することは、縄文時代から弥生時代に移行する時代における社会の複雑さを反映したものといえるでしょう。このほか、別の遺構では突帯文土器を含まず、板付式土器のみがまとまって出土しています（写真５）。土器以外では、稲穂の収穫具である石庖丁が出土しており、周辺で稲作をおこなっていたのかもしれません。薬師の森遺跡は、日本最古の農村といわれる福岡市板付遺跡から５ｋｍしか離れておらず、こうした立地条件から乙金地区にいち早く農耕文化の波が押し寄せたのでしょう。こうした資料は弥生時代開始期の社会を復元する上で非常に重要な発見といえます。乙金地区における弥生時代の遺跡はまだまだ不明なことが多いのですが、今後の調査に期待ができるでしょう。

**写真４　突帯文土器（右）と板付式土器（左）**

**写真５　弥生時代の始まりをつげる板付式土器**

## ３．古墳時代－乙金大開発の時代―

### ｉ）古墳を造る

古墳時代の終わりごろ（６世紀後半～７世紀）、乙金山の山麓にはたくさんの古墳がつくられました。これらの古墳は、巨大な前方後円墳などではなく、直径10ｍほどの小規模な円墳で、いくつも集まって造られることから群集墳とも呼ばれています（写真６）。古墳は人工的に土を盛り上げた墳丘（写真７）の内部に、石で造った部屋である横穴式石室（写真８）を備えています。石室は１つ数百キロもある大きな石を丁寧に組み上げており、機械がない時代によくこんな構造物をつくったなと、古代人の知恵や技術の高さに驚かされます。横穴式石室は遺体を納める部屋（玄室）と、玄室への通路（羨道）で構成されます（写真８）。羨道を通じて出入りでき、何度も遺体を埋葬できるつくりになっていることから集団（家族）用の墓ともいえるでしょう。古墳を造るには、①山の斜面を削って平坦面をつくる。②石を積み石室を組み上げながら、石室の周囲に土を盛り、墳丘をつくる。③天井の石を置き、さらに土を盛る、という多くの労働力と高度な土木技術が必要でした。乙金山山麓には約100基ほどの古墳があった推測され、この時代に大規模な開発があったことを物語り

**写真6　山裾にいくつも造られた古墳**

写真7　乙金宝満宮の裏で発見された古墳

写真8　真上からみた古墳

写真9　正面からみた古墳

ます。これまでに調査した古墳のほとんどは、盗掘にあったり石を抜き取られたりしているため、大きく破壊された状態で発見されていますが、石室の中からは土器のほか、金メッキの耳飾や勾玉・ガラス玉などのアクセサリー、鉄鏃などの武器が発見されています。

### ii）集落跡の発見と人々の暮らし

では、このような古墳をつくった人たちはどのような暮らしをしていたのでしょうか。次にムラの様子について見ていきたいと思います。

緩やかな丘陵の上にある薬師の森遺跡では５次調査地を中心にたくさんの竪穴住居跡が発見されており（写真10）、現在までに80軒ほどを確認しています。ほとんどが６世紀後半～７世紀初め頃のもので、比較的短期間に集中して人々が生活を営んだのでしょう。竪穴住居は１辺５ｍほどの大きさで、４本の柱で屋根を支えるつくりをしており、炊事場であるカマドを備えています（写真11）。住居の中からは土器などがそのまま残されていることもあり（写真12）、当時の人々の生活を垣間見ることが出来ます。

出土した遺物を詳しく調べてみることによって、ムラの中の様子が少しずつ明らかになってきました。例えば、焼き損ねた失敗品の須恵器や須恵器をつくる際に生じる焼き物の破片が出土していることから、近くに須恵器をつくる工房があったと推測できます。また「鉄滓」といわれる鉄の道具をつくる際の廃棄物が多数出土していることから、ムラの中で鉄器

**写真10　古墳時代のムラの跡**

**写真11　発掘された竪穴住居**

**写真12　竪穴住居の中に残されていた土器**

づくりをしていたのかもしれません。このようにモノづくりに関わる遺物が出土していることから、ムラの中に職人（しょくにん）がいた可能性が大きいといえるでしょう。さらに興味深いものとして、朝鮮半島（ちょうせんはんとう）に系譜をもつ遺物が出土しており、注目できます。このムラの人々は須恵器づくりや鉄器づくりを仕事の一つとし、さらには海を越えた朝鮮半島の人とも交流をしていたのでしょう。

ところが、６世紀後半～７世紀初頭にたくさんあった住居は７世紀中頃～後半にはほとんどなくなり、集落は次第（しだい）に姿を消していきます。

## 4．奈良・平安時代　―小さな村と役人の姿―

都が平城京（710 年～）、さらに平安京に遷り（794 年～）、大宰府が賑わいをみせていた頃、乙金地区の様子はどうだったのでしょうか。奈良時代の遺構としては、竪穴住居や掘立柱建物（写真13）、井戸、須恵器の窯などが発見されています。竪穴住居は、これまでいくつか発見されていますが、古墳時代に比べると遥かに少なく、比較的小規模な集落であったようです。しかしその一方で、一般的な集落からは発見されない転用硯（須恵器の蓋を再利用した硯）や、銅製のベルトのバックルなどが見つかっており、大変注目されます。転用硯の存在は、文字を書くことができる人がいた事を示しますが、当時文字を読み書きできるのは、ごく一部の人々（役人など）に限られていました。またベルトのバックルは、当時の役人の正装に必要不可欠なもので、県内でも数点しか発見されていない大変貴重なものです。こうして考えると、役人がこの村に住んでいた可能性も指摘できるでしょう。乙金地区やその周辺では、官衙（当時の役所）は見つかっていないため、ひょっとしたら大宰府まで出勤していたのかもしれません。

これ以外に奈良時代の珍しい遺物としては、文字の刻まれた須恵器が発見されています（写真14）。漢字で「多来」と書かれ、当時の地名を示すものと考えられています。この須恵器は「たく」の地で作られ、運ばれてきたのでしょうか。

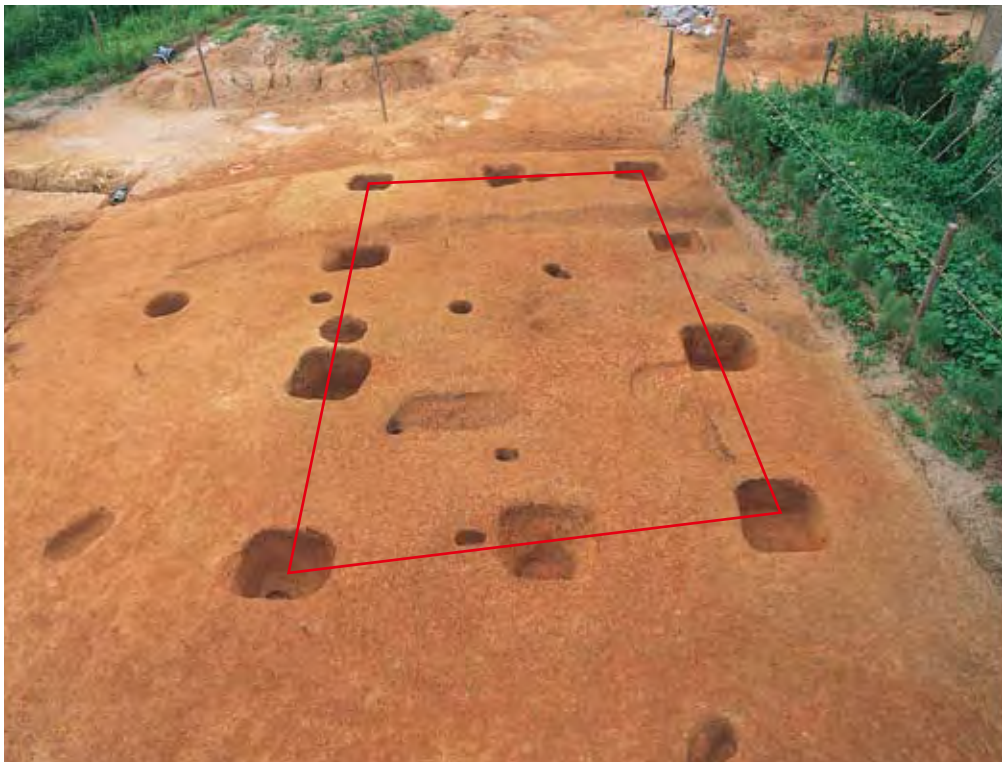


**写真13　掘立柱建物の跡**

続く平安時代にも、小規模な集落が営まれ、掘立柱建物やお墓（土坑墓）などが発見されています。見つかった建物の数や土器の量は決して多くはありませんが、貴重な遺物として「四王」と刻まれた瓦を紹介します（写真15）。この瓦はあまり例がないのですが、乙金地区以外では、四王寺山の毘沙門天近くなどで発見されています。四王寺山には、奈良時代に四天王（持国天・増長天・広目天・毘沙門天）を祀った「四王院」が建てられていたことを考えると、「四王」瓦は四王院のために作られた可能性が高いといえるでしょう。ではなぜ、乙金地区で出土したのでしょうか。いろいろ想像することができますが、ひょっとしたら、当時の人々が四王院参りの記念品として、落ちていた瓦を持ち帰ったのかもしれません。

**写真14　「多来」と書かれた須恵器**

**写真15　「四王」と刻まれた瓦**

## ５．鎌倉（かまくら）・室町（むろまち）時代―再び大開発の時代―

### ｉ）墓から見た中世の乙金

鎌倉（かまくら）に幕府（ばくふ）が置かれ、武家（ぶけ）社会が成立するころ、乙金では再び活発な人の営みをみること

写真16　木棺墓から出土した青磁

写真17　青磁が発見された時の様子

ができます。その様子をまずはお墓の状況から見ていきましょう。薬師の森遺跡第３次調査で発見された木棺墓からは、青磁の椀や皿が７点まとまって出土しました（写真16・17）。椀は龍泉窯系青磁、皿は同安窯系青磁と呼ばれるもので、両方とも12世紀後半頃に中国(当時は宋)の南部で焼かれたものです。当時、陶磁器は全て海外(主に中国)からの輸入品だったため、大変高価で貴重であったことでしょう。一般的にこの時代のお墓に副葬する陶磁器は１～２点程度であり、一つのお墓の中から７点の青磁が出土することは非常に珍しく、ここに埋葬された人物の経済力や身分を示すのかもしれません。大野城市内における鎌倉時代頃のお墓は、ほとんどが乙金地区に集中しており、薬師の森遺跡では現在までに15基ほど発見されています。新たな土地開発に乗り出した結果、成功をおさめた人々の姿を想像できます。

### ⅱ）乙金村のルーツ？

次にムラの様子をみていきます。薬師の森遺跡ではたくさんの溝が発見されていますが、そのほとんどは直線的なもので、直角に折れ曲がるものもあり、屋敷地を囲む施設と考えられます（写真18）。溝で区画された内部には直径30cmほどの柱穴が無数に発見されており、多くの建物が建っていたことでしょう。このように溝で囲まれた屋敷がたくさんあり、多くの人々が生活したことを物語っています。また薬師の森遺跡第７次調査では深さが５ｍにも及ぶ巨大な井戸が発見されており（写真19）、当時の土木技術の高さを知ることができます。

**写真18　たくさんの柱穴とムラを囲む溝**

**写真19　巨大な井戸**

**写真20　発掘された水田跡**

**写真21　水田に残された足跡**

### iii）大野城市内初、水田遺跡の発見

薬師の森遺跡第５次調査では、この時代の水田（写真20）が発見されました。現在の水田と同じように畔（あぜ）で区画され、約40区画を確認することができました。一区画の面積は40～80㎡程度のものが多く、現在の水田と比べると小さくていびつな形をしています。一見不便そうにも見えますが、自然の谷地形を利用して効率よく水田を作るための工夫だったようです。また水田を調査する途中、当時の人々の足跡（写真21）を発見することもできました。足跡は20㎝以下のものが多く、子ども達の足跡なのかもしれません。

実はこの水田、厚さ20～50㎝もある砂の層（そう）に覆（おお）われていました。この砂は洪水で運ばれてきたものと考えられ、当時、大変な被害であったと予想されます。しかしこの砂がタイムカプセルとなり、800年前の水田の姿、人々の技術や工夫を私達に伝えてくれることとなりました。

## ６．江戸時代

江戸時代の書物「筑前国続風土記拾遺」は御笠郡乙金村について、「本村（古野・上方・下方）雉尾」に集落があったことを伝えられています。本村とは現在の乙金公民館周辺、雉尾とは雉子ヶ尾つまり大城小学校周辺のことを示しています。乙金公民館から乙金宝満宮の一帯は現在でも細い路地が入り組んでおり、江戸時代の農村の面影を今に伝えています。江戸時代の遺跡の多くは現在の集落の下に眠っていることでしょう。

発掘調査では、墓地を中心とする遺跡が発見されました。薬師の森遺跡第16次調査では200㎡ほどの非常に狭い範囲の中で、70個以上の墓穴が発見されました（写真22）。遺跡からは墓石も出土しており、「享保」「宝暦」「寛延」という年号を記したものがあることから、18世紀代を中心とする墓地と考えられます。墓の形は円形のものと方形のものがあり、棺おけの破片が出土するものがあることから、一部は木棺に納められていたのでしょう。当時のお金である寛永通宝が出土しており、六道銭（三途の川の渡し賃）として墓に納められたものと考えられます。人骨が残っているものもあり、当時の埋葬方法や葬送儀礼を知る上で大変貴重な発見といえるでしょう。

**写真22　江戸時代の墓地**

## 7．おわりに

本書で紹介した内容は、調査成果のごく一部に過ぎませんが、１万年以上にわたって連綿（れんめん）と人々が暮らし、歴史を積み重ねてきたことが分かってきました。数年前、水田と畑、山林が広がっていた田園風景は、区画整理事業によって新しい街に生まれ変わりつつあります。新しい街ではどのような暮らしが始まり、どのような歴史が重なっていくのでしょうか。

写真23　変わり行く乙金（平成23年2月）

**大野城市の文化財**
**第43集**

平成23年3月31日

発 行　大野城市教育委員会
　　福岡県大野城市曙町2丁目2番地1号

印 刷　(株)アドネット九州
　　福岡県福岡市中央区渡辺通2-3-27